

# 本を読む、 心を育む

充実した  
読書環境での  
本との触れ合い

歴史などの記憶を伝えるため、紀元前に本の祖形が生まれたといわれています。その後、記憶の伝承だけでなく、小説やビジネス書などさまざまなジャンルの本が登場。知識を深めたり、感性を磨いたり、人生を豊かにしたりするなど、本は私たちの生活に欠かせないものとなりました。

そして、子どもの読書活動は、言葉の学習や表現力向上のほか、コミュニケーション能力を高めた想像力を豊かにしたりするなど、効果があり、脳と心の両方の成長に欠かすことのできないものです。これらのことから、市では、学校や図書館、地域などで読書環境の充実を図る取り組みを進めています。

今回は、都城のさまざまな読書環境を特集。読書の拠点である「市立図書館」や「高城図書館」、交通手段を持たない市民も図書に親しめる「移動図書館車」、小学生の読書を推進する「図書館サポーター」など、「本と触れ合い、本を読む」機会にあふれる都城で、豊かな心が育めます。

◎問い合わせ

秘書広報課 ☎23-3174





本との新たな出会いの場

# 都城市立図書館

平成30年4月、Mallmallのオープンとともに、市立図書館も新しくなりました。姫城町の旧図書館からまちなかに移動したことで利用しやすくなり、来館者が大幅に増加。開館以降、約10カ月で来館者が100万人に到達しました。来館者の増加に伴い、貸し出し冊数も増加。開館から1年間で、約49万8千冊の貸し出しがあり、旧図書館の平成28年度貸し出し冊数と比べると、約2倍に増えています。

都城の「読書の拠点」ともいえる市立図書館。多くの人が利用し、多くの本が読まれるために、本とのさまざまな出会いの工夫を施しています。

## 本と出会うきっかけづくり

ショッピングモールを改修した市立図書館の空間デザインのコン

セプトは、「歩いて楽しいストリート」。まちなかで、歩いて何かを

探すような感覚で、市立図書館の通路を歩くと、木箱架に置かれた本が目にとまります。木箱架の本には、メッセージカードが添えられていて、今まで気付かなかった本との新しい出会いが生まれるのです。

## 利用者の声を積極的に聴く

購入する本を選ぶ「選書」は、図書館の重要な仕事のひとつです。市立図書館では、購入前の見本「見計らい本」を、1階「ショーケース」に展示。ここで出会う本の中から、興味のある本や置いてほしい本など、来館者の意見を聴き、購入の参考にしています。





## INTERVIEW



ねじま  
子島 泉さん(蔵原町)

旧図書館はほとんど利用していませんでしたが、新図書館になってから、利用回数が大幅に増えました。広がって座席が増えたことで、読書しやすい環境になったと思います。生け花を教えている私は、生け方のヒントを得るため、植物や陶芸など専門外の本も読みます。新図書館は、読みたい本の近くに関連分野の本が並べられているので、新しいひらめきが生まれます。これからも、新図書館を上手に活用したいです。

2階「こどものにわ」で毎週、図書館員やボランティアが行う読み聞かせ会。本との出会いが、子どもの感性を豊かにしています。

11月9日開催の「おはなしまるまる」では、10冊の絵本や紙芝居を読み聞かせ。子どもらは、初めて触れ合う本に目を輝かせ、熱心に耳を傾けます。

※開催日時など詳しくは、図書館ホームページで確認ください



感性を豊かにする読み聞かせ

### TOPIC

## コンセプトブックを発行しました！

生まれ変わって1年を迎えた市立図書館の、開館に関わった人の思いなどを紹介する「コンセプトブック」を発行しました。市立図書館で配布しますので、ぜひ、ご覧ください。

☎ 生涯学習課 ☎23-9545



興味と関心を高める環境づくり

# 学校での 本との触れ合い

本に興味と関心を持ってもらうため、市内の小学校と地域のボランティアが一丸となって、児童らに読書の機会を提供。学校で読書を支援する人たちと活動で生まれている笑顔を紹介します。



INTERVIEW



東小学校図書館サポーター  
野村 芳美さん(千町)

もともと本と子どもが好きで、平成28年4月から東小学校の図書館サポーターとして、毎日楽しく活動しています。児童が本を読みたくなる工夫として、貸し出し冊数に応じた読書ビンゴやパズルなどのイベントを企画し、手作りのしおりなどを景品にプレゼントするなど、楽しみながら読書量を増やす環境を整えています。多くの児童が本に触れ合える場所を、これからも提供していきたいです。



南小学校読み聞かせボランティア  
濱畑 愛さん(大岩田町)

子どもたちに読書を通して得られる本のぬくもりを伝えたいとの思いから、南小学校で読み聞かせボランティアを始め、6年目になりました。同校では、1時間目が始まる前に週に1回、保護者による読み聞かせを行っています。ただ読むのではなく、クイズやジェスチャーを取り入れ、楽しみながら読み聞かせています。児童の想像力を膨らませる手助けになるよう、続けていきたいです。

図書館サポーター

児童が本に親しみをもちながら、読書習慣を身に付け、積極的に学校図書館(図書室)を利用してもらうため、市では、平成22年度から「小学校図書館サポーター(サポーター)」を配置しています。サポーターは、学校の図書担当職員と連携し、児童に本を薦めたり、季節に応じた掲示物を作成したりしながら、本への興味と関心を高める環境づくりを行っています。また、教材として使う本を選んだり、読み聞かせを行ったりなど、児童が本と触れ合う場所と機会を提供しています。



市では、サポーターの配置を拡充。令和元年度は26人が活動しています。併せて、サポーターのスキル向上のため定期的に研修会を行ったり、市立図書館と連携したりすることで、読書環境の一層の充実を図っています。これらの取り組みにより、週1回の図書室の利用児童の割合は年々増加。平成30年度は8割を超える児童が図書室を利用しています。

読み聞かせボランティア

児童に読書の楽しさを伝えるため、市内の小中学校では「読み聞かせボランティア」が活動。地域住民やNPO法人が、無償で読み聞かせを行っています。ボランティアは、出勤前や昼休みを利用して参加する現役世代の人や退職したシニア世代の人など、さまざまな人が参加しています。11月12日に南小学校で行われた読み聞かせでは、2年生の教室で紙芝居や絵本の読み聞かせが行われ、児童らはキラキラした表情で耳を傾けていました。



本を楽しむ、いつでも楽しむ

# 身近な読書環境

## 移動図書館車 くれよん号

市立図書館では、サービスの充実を図るため、図書館を利用しにくい地域の人などに対し、本と触れ合える機会を提供するために、平成8年度から移動図書館車「くれよん号」の巡回をしています。23年目を迎えた今年は、くれよん号をリニューアル。本とともに笑顔を送んでいます。

積み、火曜日から土曜日の間、各小学校や地域の公民館など市内26カ所を巡回。利用者が新たな本を楽しめるよう、毎日、本の入れ替えも行っています。また、利用者のリクエストを受け付けたり、貸し出し傾向を分析したりして、地域のニーズに沿った本を届けています。

- 貸し出し期間 次の巡回日または、1カ月以内に市立図書館や高城図書館に返却
  - 貸し出し冊数 8冊まで
- ※市立図書館・高城図書館での貸し出し数を含む
- 巡回スケジュール 図書館ホームページで確認できます



【豆知識】  
ナンバープレートが  
くれよんごう  
90-45

## 高城図書館・地区公民館

市立図書館やくれよん号の他にも、市内には高城図書館や各地区公民館の図書コーナーがあります。中でも、寄贈された多数の本を取りそろえた図書コーナーでは、公民館の利用者が自由に閲覧でき、貸し出しなども行っています。本を通じて人々が集い、地域のコミュニティの場としてさまざまな世代の人が利用し、笑顔が生まれています。



市では、平成26年度から、赤ちゃんに絵本をプレゼントする「ブックスタート」を行っています。4カ月相談の機会に、絵本をプレゼント。初めて本と触れ合う機会を提供しています。

また、相談時に、読み聞かせ講師や図書館員などによる読み聞かせを行ったり、絵本の選び方をアドバイザーしたりします。赤ちゃんにとって「本との触れ合い」は、パパやママなど大好きな家族から語り掛けられる心地良さと愛情を感じることに。親と子が楽しい本との触れ合いの時間を共有することは、子どもの感性を育み、かけがえのない思い出になります。



INTERVIEW

南園<sup>あかり</sup>明さん、采<sup>ことば</sup>芭ちゃん親子  
(下長飯町)

娘が4カ月を過ぎた頃から、ブックスタートでもらった本や図書館で借りた本を、入浴する前に毎日、読み聞かせています。

ブックスタートでもらった絵本「おやすみ」を読み聞かせたとき、最初の頃は、ジッと耳を傾けているだけでしたが、次第に絵やページをめくる動作に興味を示し、笑顔で喜んでくれるようになりました。私も幼い頃に、母からたくさん本を読んでもらい、本が好きになりました。母のように、これからも子どもに本をたくさん読んで、本の好きな人に育ってほしいです。



プレゼントの例

【取材を終えて】  
新しい世界の扉を開く

インターネットをはじめ、さまざまな情報メディアが発達した現在、「読書離れ」が指摘されています。しかし、今回の取材を通して、「本と触れ合い、本を読む」さまざまな環境が都城にあることを実感しました。

そして、取材時に印象深かった、本を読む人たちの表情。目を輝かせていたり、鼻を膨らませていたりしながら、まさに「読書に夢中」になっていました。このところ読書をしていなかった私は、その人らが「新しい世界の扉を開いている」かのような錯覚すら覚え、うらやましく感じました。

新しい世界の扉を開く可能性もある「読書」。この環境が充実している都城で、私も、本と触れ合う生活を楽しんでみたいと思います。